瀬田の丘

創刊 1973 年
編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

今日のみことば
年間第 11 主日　B 年（2024 年 6 月 16 日）

瀬田教会主任司祭　小西広志神父

第一朗読：エゼキエル書　17 章 22 ― 24 節
第二朗読：コリントの信徒への手紙二　5 章 6 ― 10 節
福音朗読：マルコによる福音書　4 章 26 ― 34 節

からし種を大きくする方

福音朗読ではふたつのたとえ話があります。一つは 26 － 29 節の成長する種のたとえ話です。イエスさまが元々お話ししたたとえは 28a 節「土はひとりでに実を結ばせる」までで、28b － 29 節は初代教会がイエスさまのたとえ話を解釈した時の理解であろうとする注釈者たちもいます。

元々のたとえ話を通してイエスさまが言いたかったのは、次のようなメッセージではないでしょうか。種が土に蒔かれると、人の「知らない」うちに「ひとりでに」成長し、確実に「実を結ばせる」。これと同じように神の国も、人の関与なしに、神自身によって必ず実現するというものです。

それに加えて、「まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実」といった具合に、成長のイメージを用いながら、段階的な神の国の実現を言わんとしているのでしょう。

もともと神の国は「秘密」でした（11 節）。それが、種として蒔かれ、実を結び、豊かな実を結ぶようになっていきながら、目に見えるものへと変えられていくのです。

30 － 32 節は、からし種のたとえ話です。からし種は、最も小さい種だと言われています。黒からしは直径が 0.95 ～ 1.6 ミリメートルだそうです。からし種から生じるからし菜は、高さは 1.5 メートル、地中海沿岸では 3 メートルまでに達するそうです。

神の国の秘密は今は隠されているが、やがてこの世に対して明らかになるということを言いたいのでしょう。ここでも成長のイメージが用いられています。

福音朗読の最後、33－34節に注目してください。弟子たちだけには密かに神の国の秘密が明らかにされたのでしょう。イエスさまのたとえ話を理解するためには、弟子としてイエスさまに従い、イエスさまから直接、その真意を教えてもらわなければならないことを示唆しています。

【ちょっとひと言】

第一朗読にある「移し植える」は、人間に対する神さまの介入、関わりを表す表現となります。神さまは、ご自分から、手をかけて、移し植えてくださるのです。「うっそうとしたレバノン杉」とは、枝を広げ、天高く伸びていく杉のイメージです。神さまが手ずから移し植えてくださったからこそ、杉は大きく成長するのです。そして、「知るようになる」という言い回しから、神がイスラエルの民を通じて歴史の中で働かれる、介入することを知るようになれるのです。

第二朗読で示されている見えないものに目を注いでいく生き方は、この世の生き方とは少し違います。そのことが朗読の中に指摘されています。

1.「主から離れている」とは、現実を正しく認識し、受け入れることの大切さを教えます。

2.「主に喜ばれる者」とは、生き方の基準に、あるいは基礎に、主イエス・キリストの思いに従うことがあることが示唆されています。

3. そして、「裁きの座の前に立ち」で、終末の時にキリストの前に立たされるのだという意識が必要であることを気づかせます。

福音朗読では「人が土に種を蒔いて」とあります。種を蒔く人は、ただひたすら種を蒔き続けます。成長させてくださるのは神ご自身なのです。

あやふやな知識で申し訳ないのですが、イエスさまが見ていた「からし種」と、その成長した「からし菜」と、現在、パレスチナで見られるそれとは違う品種だと聞いたことがあります。まぁ、それはともかくとして、春の頃にパレスチナ地方を訪れると、あちらこちらにからし種の花が咲いています。日本で言えば、菜の花のような感じです。黄色い花が咲いていました。現地の方に伺ったところ、春先は咲き乱れている「からし菜」の花も、初夏の頃にはすべて枯れてしまうそうです。それほどパレスチナ地方の陽の光は強いのだそうです。

そうしますと、今日のイエスさまのたとえ話も別な味わいになります。鳥が巣を作るくらいまで成長する種はごくわずかだったのかもしれません。イエスさまのたとえを聞いている人びとは農民たちです。「そんなはずあるか」といぶかしがったのではないでしょうか。